

吉村秋陽『秋陽叟事歴之略記』翻刻(一)

荒木 龍太郎
若木 太一

はじめに

吉村秋陽、名は晋、字は麗明、通称は重介、隆介、秋陽は号。寛政九年(一七九七)〜慶応二年(一八六六)、享年七十(注1)。広島藩支藩三原藩の陽明学者で佐藤一斎の高足である。秋陽は青年時代までは山口西園、伊藤東里に従学して古義学を学んだが次第に疑念を懐き、三十四歳の佐藤一斎への従学を契機として陽明学に転じ、四十六歳頃までに陽明学者としての学問を確立した。彼の学問は三度にわたる長府督学、四十六歳、五十五歳の東行における佐藤一斎の代講、藤樹書院での講釈、朝陽館(広島城内)、明善堂(三原城内)、家塾での教授活動、さらに石見、京都、岩国、多度津での講釈など、晩年に至るまで、広い範囲にわたって影響を及ぼしたのである。その間、佐藤一斎との師弟関係は緊密であり、大橋訥庵、春日潜庵、池田草庵、林良斎、楠本端山、楠本碩水等と終生真摯な交渉を継続し、幕末期に於いて陽明学者として名を馳せていたのである。門下には勤王の士の東沢瀉がいるが、秋陽の学問の傾向は直接的な政治行動よりも、着実な思索と体認とを重視するものであった。

秋陽は佐藤一斎の厚い信頼を受けていた関係で、昌平坂学問所の内情にも詳しく、また幕末の緊迫した藩政の相談に

もあずかつて藩の機密にも関わった。

秋陽の自筆の事歴についての現存の記録類は次の三種類である。

A、『讀我書樓長曆』は文政十二(一八二九)九月十五日〜慶応二年(一八六六)十月八日までの漢文体の日記である。その内、天保二年(一八三一)七月二十四日〜天保四年(一八三三)六月十八日、及び天保七年(一八三六)七月十六日〜十二月十三日(招聘記)は現存しない。

B、『秋陽叟事歴之略記』、「上」は初生〜五十九才、「中」は六十才〜六十七才四月、「中」(の巻二)は六十七才五月〜六十九才十二月二十八日まで。書簡の写しを含む重要案件の備忘録である。

C、『秋陽事歴略記』(慶応二年九月十三日記)は先の短いのを予感してか、Bなどにもとづいて事歴を簡略に記したものである(注2)。

Aは日記で毎日記されており、秋陽の活動の様子が詳しく分かる。ただ事柄の背後の事情となると隔靴搔痒の恨みが残る。それに引き替えBの記録文書は、重要な事柄の内情を細かく記録しており、彼の思想活動のみならず幕末期知識人の活動の諸相を具体的に理解するための欠かせない内容を持っている。翻刻紹介する所以である。

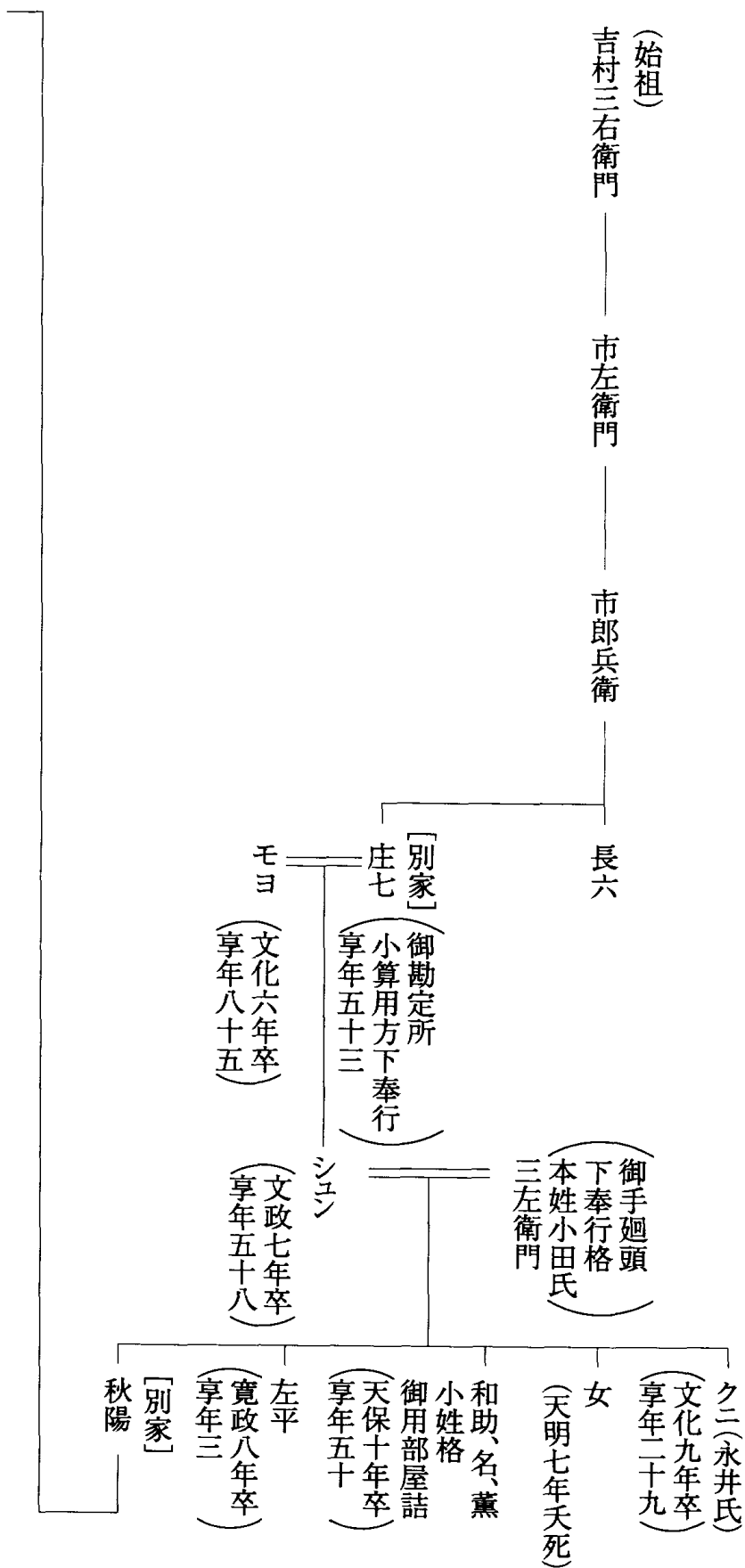
翻刻にあたっては、長崎大学人間環境学部若木太一教授から全面的にご指導、ご協力頂いて共同研究の形態をとることにした。

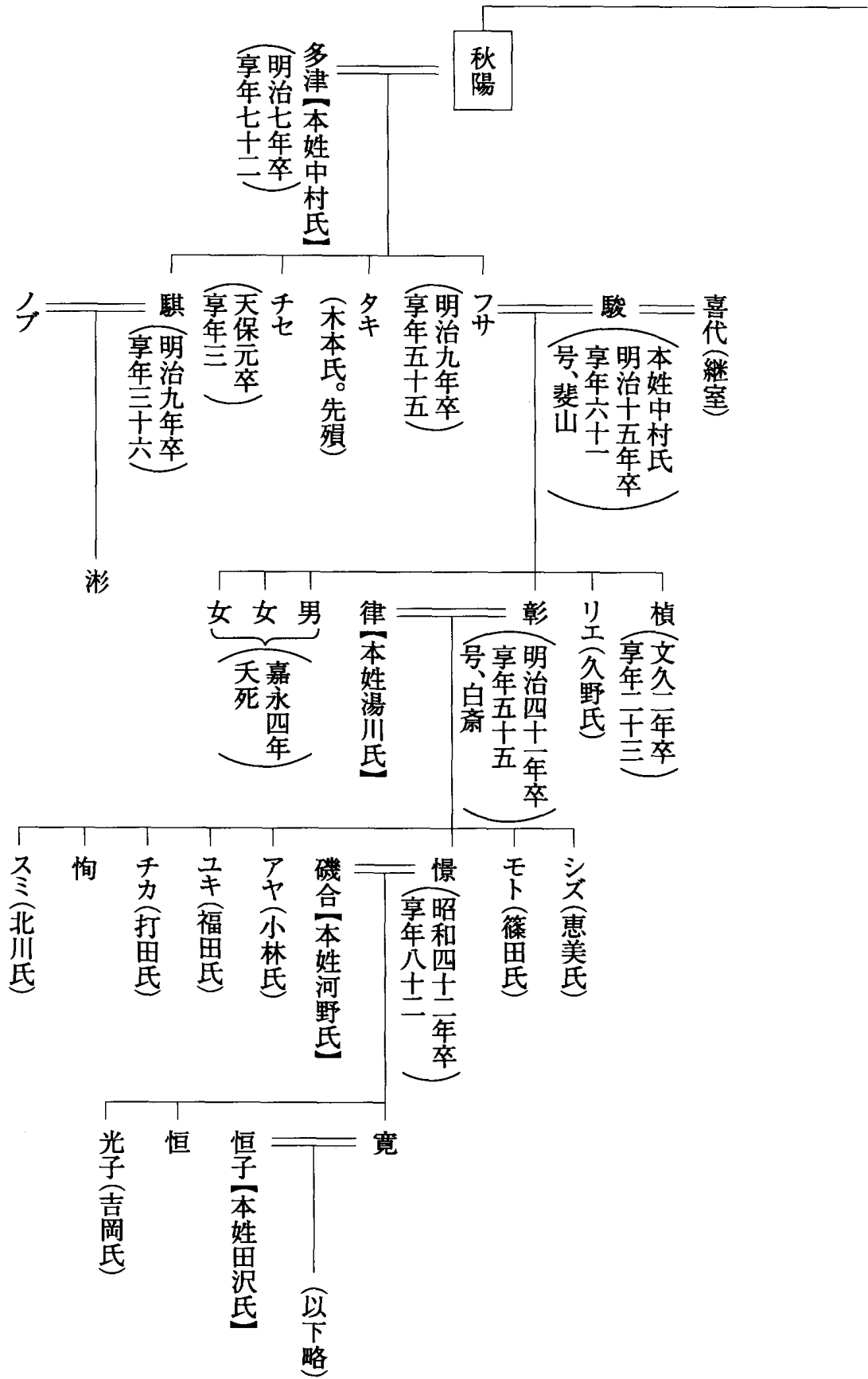
凡例

- ・ 解読不能な文字は□で示した。
- ・ 読解の過程で句読点を加えた。

- ・漢字は通行の字体を用いた。
- ・丁付けを附した。
- ・ミセ消の部分は傍点を該当文字の右側につけ《》の中に記した。

家系図





『秋陽叟事歴之略記』

自初生至五十九歳

秋陽叟事歴之略記 上

去年甲寅十二月五日安政紀元 【表紙オ】

小田氏ノ祖父母ノ墓法正寺ニアリ。正田氏トアリ。正田箴四郎方実家小田氏ナリ。箴四郎正田氏を繼。故ニ小田ノ名跡ハ絶タリ。先考ヘ対シ心カ、リナレハ余ノ子孫ノ中一人此小田氏ヲ姓トシテ其家ヲ立ヘキ也。

祖彦助君 十二月十四日。

祖母君 同二十日。

神主ハ本家《正田氏》ニアリ。【表紙ウ】

秋陽出処之概

祖考 諦道君 忌日四月朔日。

名某庄七ト称ス。三原宗家今ノ吉村権七《八》方ヨリ別家。御勘定所小算用方下奉行格。卒年五十三。

祖母氏 モヨ 善念君。

下郡綾谷村ノ人。卒年八十五。文化六年己巳八月廿四日。余十三歳。

考 大慈院君 十二月二十六日。寛政九丁巳。

名某三左衛門ト称ス。小田彦助ノ嫡子。吉村氏ノ義嗣トナル。御手廻頭。卒年四十二歳。是歳余生ル。下奉行格。

母氏 シユン 【二オ】

庄七君ノ女中年ニ卒ス。正月七日。異父兄及異母兄アリ。異母兄早世考家督ノ後配シテ夫妻トス。年三十一ニシテ先

考亡ヒ寡ナリ。時ニ祖母君恙ナク伯兄纔ニ八歳伯姉十五余生未周年ナラス。諸子ノ成立皆其勞に出ツ。

百艱備ニ嘗ノ其報ヲモ受スシテ卒。年五十八。寶池院君。文政七年八月十八日。

我家ハ祖考先考早世ユヘ祖母君母君維持ノ余慶ニヨリ両家トモ是ニ到ル。故其恩子孫世々忘ルナカレ。

祖母君在世ノ日母氏ヘ常ニ戒諭アリ。母氏ヨク其志ヲ続テ艱苦中ニ余兄弟ヲ勸課シ名ヲ成ヲ【一ウ】

(頭注・異父兄ハ後ナシ。正月七日ハ其忌日ナレハ心得アルヘシ。万福寺ニ葬ルヨシナレト墓モシレズ。万福寺ニ尋

ネ追遠スベシ。異母兄モ早世ユヘ、本家ヨリ追遠スヘキヲ、法名本家ニアリ。【二ウ】

以丈夫ノヲトスル。平日ノ教訓ナリ。余幼時猶詳ニ記スルヲナリ。今ニ一念此ニ及ヘハ風樹ノ感イカントモシ難シ。

子孫ヨク此意ヲ体セヨ。

(頭注・祖母君ハ後配ナレハ嫡祖母ノ法名卒日ナト本家ニアリ。)

兄弟五人

一女 クニ 永井氏ニ適ク。常五郎元介ノ母。二十九卒。文化七年九月廿四日。余十四歳。

二女 露玉君 蓐中ニ夭ス。天明七丁未六月十六日。

三 伯氏 光顯院君 本家。名董、和助ト称ス。家ヲ繼ノ年甫八歳小性格御用部屋詰五十歳ニテ卒ス。御家流ノ書ヲヨク

ス。京都大谷宮内卿ノ門人トナリ上京アリ。晩年迄ノ門人凡千余人ニ及フ。天保十年九月十六日。

四男 寛政八年丙辰。佐平ト称ス。痘ヲ病卒ス。三歳。智全君三月十一日。【二オ】

五男 名晋字麗明秋陽又六郷史氏ノ号アリ。初直吉又直藏隆太郎東武ニテ隆介後重介ト改ム。皆通称ナリ。《初六郷後秋

陽ト改》。

寛政九年丁巳二月四日生。其年十二月先考ヲ失ヒ母氏及伯氏ノ手ニ育ス。

十五歳 山口西園翁ノ門ニ入読書古義ノ学ヲ修ム。

十七歳 五月十九日直藏御用ニテ御目付木野内軍之丞宅へ罷出候処学事出精仕候段達御聴ニ付貳人扶持ニ金壹両学資被下。下奉行格被召出。遠樹院様御代ナリ。

十八歳 春二月に独行上京。古義堂へ入塾。夏還。

古義堂

伊藤弘美字延蔵号【二ウ】

東里通称延蔵。十九ノ暮ヨリ上京山陰道通行(ママ)翼夏帰郷。此上京《旅行》故アリ。山陰通行ニヨリ帰郷ノ上三日閉戸被仰付。

二十一歳 前年秋七月講学所開館ニヨリ今春ヨリ学派相改湯浅正平門人分ニテ講学所助授相勤ム。

十二月御増銀ニテ以来百五拾目ニ被成下。此時御当代様ノ始ナリ。其後小姓格三人扶持ニ被成下。

二十三歳 三原学堂開創ニヨリ備中鴨方村ノ処士西山孝恂御招因聘使トシテ鴨方へ罷越。孝恂ハ拙齋先生ノ次子。茶山

翁ノ紹介故往来トモ茶山へ逗留ス。【三オ】

二十五歳 此秋妻中村氏ヲ娶ル。

二十六歳 三月廿二日長女フサ生ル。其四日メヨリ寶池院君暴病。秋ニ至リ追々平癒候。

二十八歳 此秋中元頃ヨリ寶池院君病再発。

八月十八日卒去セラル。

九月十四日女タキ生ル。

二十九歳 切米高六石被下。御銀上ル。

三十歳 此年余夫妻別家。

三十二歳 此冬御玄関小姓打込被仰付御褒美金百疋。

此年六月女チセ生。

三十三歳 九月十九日出足東遊ス。来卯ノ九月迄全ニカ年ノ願相濟。

十月初伊予今治藩ヨリ招カレ尾道ヨリ同方へ渡海。翼春迄留リ教授ス。大夫以下士庶学ニ志アル人來集ス。

二月十三日同所出船。廿日ニ【三ウ】

大阪へ着。夫ヨリ京都ニ六十日余滞ル。其中三十日計リハ病ナリ。閏三月廿九日出足。四月十三日江都着。

一斎先生へ入塾。明年正月林家へモ入門。其七月ニ江都ヲ発信濃松本藩へ招カレ十月迄滞留。其間二十日計リ同国水内郡小布施村へ参リ土豪市村清之助方へ滞リ易ヲ講ズ。

十月信濃発程。独行ニテ中山道ヲ上リ太田川ヨリ船ニテ桑名ニ抵リ皇太神宮へ拜参。伊勢路ヲ上京。

十一月廿五日帰郷。

但江都ニ居候節ニヶ月追願申遣シ御免故十一月ニ帰郷イタス。

前年寅ノ二月五日末女チセ痘ニテ卒ス。三歳。【四オ】

法諡ハ智閑祖父母君ノ墓ニ蔵ム。此時余ハ猶今治ニアリ。上京シテ其報ヲ得タリ。

天保壬辰 三十六歳

春二月末ヨリ疫疾。三月ノ末危殆後追々快復。

五月九日主公江都へ御祇役。其後六月より九月迄病申立引籠。

御帰館ノ上格禄差上隠居仕度旨内嘆書出ス。実ハ家道屯遭ノ故ナリ。

有司ヨリ種々差留且賑故ノ事モアリテ十二月ヨリ再勤。尤家内分散妻及次女ハ中村ヘ托シ長女ハ本家ヘ遣シ
ヲキ余猿樂丁米屋忠左衛門別荘江独居。

三十七歳 五月廿七日切米高【四ウ】

式石加増年分学事入用銀五枚被下。筆頭格被仰付。此節八家内三人ハ天神丁吉田屋佐助水楼ニ寓居。明後年
未ノ夏猿樂丁別荘ノ表ヘ引移一家団円ス。

三十九 此八月ニ江都一斎翁ヨリ長府一条申来リ返報ニ及。

十二月初長府ノ侍医坂井玄庵来訪。内意相談。此人ハ往年広嶋星野氏ヘ遊学。我門ヘモ入シ故旧知ナリ。
十二月末長府ヨリ使者中川清左衛門ヲ以拙御招ノ義藩侯ヘ被仰入。

丙申

四十歳 正月九日 藩ヨリ長府侯御頼ノ旨

主家ヘ申来ル種々議論【五才】

アリテ先半年差出サルヘキ由御請ニ及ハル。

長府ヨリハ一ケ年ト申来。

六月十五日武藤九右衛門江都方長府御内使トシテ来ル。

此年ハ府侯在江都。主公ヘ御挨拶并ニ余ニ聘儀ヲ修メラル、故ナリ。

十七日二丁目長門屋与三郎別荘ヘ御引受ニ礼相調饗宴アリ。其後使者ハ直ニ長府ヘ帰郷。主公ヘ白布二匹余
ヘモ同シ被下モノナリ。

七月廿日発程。陸行ニテ二十七日長府着。同年十二月十九日帰郷。

逗留中賓礼丁寧ヲ尽サル。帰郷ノ節金五十兩銀八百目被下。但使者来ル。

逗留ハ藩中ノ明キ屋敷故繕ヒ渡サル。門人一人飯田俊輔【五ウ】

徳山藩士ナリ。僕一人從者俱ニ二人。

月別賄料銀貳百五拾目ツ、外ニ銀五枚筆紙料ヲ賜。此ニ条再遊ノ節モ同。大抵二十口ノアテナリ。帰郷ノトキ舟ヲ出サル。

是歲二月廿日〔十九日〕切米ニ石加増仲小姓ニ被仰付。長府行ノ命アリシ故カ。

戊戌

四十二歳

去冬又々長府ヨリ飛脚来。再聘ノリ主家へ御頼相調。当正月九日出船。

從者湯淺孝太郎正田保次郎若党尾村甚五郎俱三人。孝太郎ハ其父東左衛門病ニヨリ閏四月急ニ帰郷。

同廿二日長府着岸。

今度ハ世子御在邑故執謁ノ後度々侍読。賓師ノ礼遇厚シ。二月末ニ世子東発アル。【六オ】

同十二月廿日帰郷。留寓中接待ノ諸向丙申ノ行ニ同シ。帰郷ノ節使者ヲ以厚謝アリ。白銀二十枚八丈縞ニ反ヲ賜フ。

己亥

四十三歳

正月十五日高拾五石ニ被成下。知行取格御近習役ニナル。此時銀五枚カ上ル。学事格別ニ上達長府御用向首尾ヨク相勤御満足被遊候ニ付講学所ハ湯淺孝太郎申合セ可相勤旨

御達之大意右ノ通。

是歲九月十六日伯氏物故アル。去冬ヨリ嘔噎ノ症発シ療治驗ナシ。

十月ニ長府侯帰邑ア【六ウ】

リ。本府通行招命アリテ城西玖波駅御書所ニテ始テ執謁礼待懇至ナリ。

其後十月廿八日長府ヨリ御飛脚来御屋敷并重介ヘモ御招被成度旨申来即被遣侯御返答アリ。

十一月十五日出立。陸地下向。同廿一日長府着。従者五人。徳山藩玉井孫四郎是ハ西遊好ニ付若党分ニテ同行。御貸人田村増十、小人和吉、僕一人、内増十八先ニ返ス。宿御本陣上下御賄。滞留中度、謁見御家政向ノ義種、御内議アリ。罷出之度御次拂ナリ。御礼待尤至レリ。上卿細川市正殿ハ僕ヘ心酔ノ人ニテ侯ノ愛壻且名大夫ノ聞アル故侯モ殊ニ御倚頼ナリ。此人モ一度ハ一所ニ【七オ】

召サレ密議アリ。又同方ヘモ度、罷越内話イタシ置。此行終身ノ愉快ト覚ユ。機密ユヘ悉ハシルサズ。十二月二十日御使者トシテ御近習供頭乃木喜十郎旅宿江見ユル。御口上。

今度寒氣ノ節遠路御苦勞被下乍暫時度、預御教諭厚辱乍然御滞留中何之御風情モ無之御殘懷ニ思召候。近日御出立ニ付御暇乞乍略以使者被仰述御目錄之通至極疎末之品ニ候得トモ聊御餞別之印迄ニ御贈ニ被成候。

目錄 縞縮緬 二端 別ニ御口上。

猶御主人家并先生是迄数度館中御世話被成下候御挨拶向ハ明春御国元ヘ以使者被仰遣候。【七ウ】

同日登城。於御小書院御料理被下候節御用人持参ニ而御紋付麻上下被下御逢之節御直、白紙三卷六拾枚被下。

廿一日ハ細川氏江被招。御役者中参リ舞囃子ニテ餞飲アリ。

廿二日出足。同廿七日帰郷。

庚子

四十四歳 諸藩来遊之門人今年ヨリ尤多シ。兎駿嗣子ノ願二月五日相濟。

三月十一日長府ヨリ御使来参リ為積御挨拶。

御屋敷へ御家老連署之御書并鯨肉一桶被遣候。重介へ御側御用人連署侯之御例詞申候御書及白銀三十枚被下。但兼テ御使者之差立候筈之処実ハ去冬同方へ罷越候節御用人中内意ヲ受候事故何トナク断置候故也。【八才】

五月十九日駿兎長女婚事成礼。

同十一月朔夜亥ノ下刻長孫貞太郎生。

十二月廿五日四ツ時御用召無別条相勤。倅小一郎学事出精仕候段御聞届被成依之稽古料年々銀五枚ツ、被下候。

日々講学所江罷出助教等相勤サセ可申旨。

辛丑

四十五歳 此年 大御所薨逝。文恭ト奉諡。

正月十五日卯中刻男謙二郎誕生。次男トス。

八月八日次女八重漸改名。同家中仲小姓御供使木本常之進江嫁付。【八ウ】

十一月十日夜より同方大変ノ由常之進御下屋敷江被遣困ヒ家内江モ番付。恐入申出候処先不及其義自分謹慎可仕旨被引籠。但病氣分也。

壬寅

四十六歳

旧臘廿五日江戸佐藤先生之急書大坂より相達。旧冬十一月廿六日先生公儀へ被召出御儒者被仰蒙候ニ付重介江相頼度事件有之ニ付都合出来候ハ、四五年遊学旁出府可致旨申来候故早速右来状差出内伺ニ及候処格別之義ニ付出府可然旨先一ヶ年之願書謹慎中ニ付候得共差出不苦旨常五郎より様子相聞候故願書相調正月二十七日差出二月二日免許ハ五月三日出足。山陽道より江都へ罷越。但木本一件相決候上出足ト存見合居候得ども兎角埒明不申ニ付不得已致出足候。長府小田亨太郎徳山玉井脩藏【九才】
兩人隨行姫路より北行新丁と申処迄参候而但馬生野銀山へ飛脚差出桜井三郎ヲ相迎へ御家ヲ申来候。要用相談致一宿致分袂夫より後御着駅へ出ル。

右三郎故出石藩桜井良藏《三郎》之次子。往年東遊之節同塾之人にて候。出石へ乱後近年ニ至リ又一姦臣出檀權其故ニテ其兄一太郎ト俱ヒ其藩暇ニ相成。兄ハ京師三郎は銀山郷学之主事被相頼同方ニ寓居。
五月十九日浪華着。

六月十五日江戸着。直ニ昌平坂佐藤先生御仮宅ニ寓居。弟子兩人は書生寮ニ入ル。両三日にて先生ヲ今度之
用向被申聞色ト拙考モ申述此返答暫被相待候様申置。此一条は
今般公儀より庶務御改革被仰出候ニ付

聖堂諸生寮是迄通ニ衰微且惡風儀ニ相移、右ニ付此度勸学之徳令被相行【九ウ】
候事ニ候得者ハ右寮も是迄之成行にては不相濟屹度改革有用人物出来候様世話可仕旨林家之思召にて拙ヘ右
改革一条可被仰付、左候得者何レ暫は差留候趣藩邸留守居衆へも内ト相談置右弥入寮相濟候上者此後逗留之
義者林家ヲ留守居衆迄御達御屋敷へ申来候筈。

右暫之間にて改革相濟候而も其後とても帰国者出来不申何れ榮進之階子ト相成候事終身之隱顯此一条ニ相決

候事故甚致心痛候事。

重介義林氏先代快烈公之門人ト申趣意にて右御用被仰付。乍然是迄先例も無之義ニ候。快烈公始大學頭後大内記故ニ内史公トモ称ス。

其後未返答申出スノ内ニ最早御儒者中一統議論相約リ無是非御請一応は入寮之志ニ相決シ巨細永井常五郎迄申越【十才】

此節聖堂附御儒者

布衣 古賀小太郎

野村兵蔵

杉原平助

佐藤先生

右内儀承候処此改革一条古賀義一人最初より不同心之趣ニ候得ども林式部殿より度々大議論有之終ニ一応承服被致候事。

右不同心甚故アル少量之見識一晒ニ充タス。

其後寮中之諸氏様子相伺察色々相講申立非理之論有之。式部殿始大ニ被致憤怒右様公威ヲモ致蔑恕候悪風即改革ニ至ラサルヲ不埒之義ニ候。重介入寮之後存意次第一人モ不殘一応致放逐候而も不苦旨式部殿着国有之。先其魁首之分者入寮以前ニ召思有之旨にて即日退寮【十ウ】被仰候。

高崎藩 長谷川与一郎

中津藩 白石孫二郎

其他者入寮之上にて御相談とも取計可申旨

右故障一件深キ故アル事之由徒ニ書生之論而已ニ無ク其淵源有之由右故障申立候者皆古賀門人。

両林家ノ内専式部殿此条取計被申候故同義へ数反罷越議論相詰候事。

右ニ付最早騎虎之勢故志慮相決是非入寮之積リニ候事。

両三日中入寮ト申処ニ相成、再度細考之処後条一切望不申旧主ヲ離、他邦へ移候事イカニモ不安之心相休ミ不申右後者分外之事ニ数年ノ光陰ヲ費可申不可然被存候得とも今之様子にて候。重介一存之断りも出来不申

【十一才】

種々工夫相用一良計ヲ得藩邸へ参り金子徳之助へ致内談同人取計執政近豊前殿へ相談之義有之。

其後林式部殿迄藩邸重役ども内存にて平生之義にて御用相勤候義者一統難有奉存候得とも右故障も出来候様子にてハ御場所移之義万一異変之事も出来候而者恐入候間乍内々是非御断申上候様申聞候旨にて急々相断候処又色々之議論有之候得とも約ル処左候ハ、先暫改革差合ニ相成候間一応之処勝手ニ可仕旨大ニ致安堵候。

右一条六月と十一月迄ニ漸相済。

〔未完〕

注

注 1

吉村秋陽の生涯と思想の詳細は拙著『吉村秋陽』（叢書・日本の思想家46・明德出版社・1982）を参照。

注 2

「幕末期陽明学者吉村秋陽の『秋陽事歴略記』について」（活水日文・二八号・1994）で翻刻を試みた。

（平成十二年一月三十一日）

吉村秋陽『秋陽叟事歴之略記』翻刻（一）